# 新潟市潟環境研究所　平成２７年度第５回定例会議（概要）

日時：平成２８年１月２８日（木）午後３時～午後５時１５分
場所：新潟市役所第１分館１０１会議室

**■会議概要**

**１　報告及び情報提供**

・「潟シンポジウム」（2/20）について（水と土の文化推進課/潟環境研究所）
・「雁と白鳥シンポジウム」（2/28）について（水の駅「ビュー福島潟」）
・「とやの潟ウィンターキッチン」について（新潟市南商工振興会）
・仙北平野湖沼群視察報告（潟環境研究所　大熊所長）

**２　講義**

**「松浜の池～砂山に立てば、阿賀野川河口と日本海、さらに飯豊連峰を一望できるオアシス～」**

**（加藤　功/新潟映像制作ボランティア副代表）**

・松浜の池は地元では、とんぼ池、ひょうたん池とも呼ばれている。阿賀野川右岸、海岸より約 100 メートルのところにあり、長さ約 400 メートル、幅 90 メートルの大きさの河口閉塞湖である。
・今年度に入ってから、松浜地区コミュニティ協議会との協働で、松浜の池の成り立ちと、池の水深及び面積、池の形状変化について調査を行っている。

**【池の成り立ちと形状変化について】**

・松浜の池付近の昔の地形図をみると、明治・大正頃、このあたりは砂山と荒地（湿地）が広がっていたことがわかる。これはあくまで仮説であるが、大正末～昭和初期にかけて新井郷川を開削したことをきっかけに水脈に変化が生じ、窪地に湧水が溜まって池となったのではないかと考えている。
・昭和初期では入り江で阿賀野川と通じていたが、昭和 48 年頃、阿賀野川の土砂によって入り江の口が閉塞され、現在の形になったと思われる。これ以降、大きさが若干小さくなっているものの、池の形状に大きな変化はみられていない。

**【池の面積と水深、水面標高について】**

・松浜の池の面積について、今回 GPS を使った電子測量の結果、約 2.2 ヘクタールであった。これまで地元では約 2.6 ヘクタールと認識していた。池の面積は若干減少傾向にあると考えられる。
・池の水深は魚群探知機を使って測量し、そのデータをもとに、水深分布を表した。すると池の水深 50 センチくらいの水域は池の水際から 1 メートルくらいのところまでの狭い範囲であり、それ以降は急激に深くなることがわかった。最も深いところで、約 1.7 メートルの水深があった。
・池を調査した 11 月 3 日午後 2 時の水面標高（ＴＰ）は約 0.75 メートルであり、当時の日本海（0.47 メートル）や阿賀野川の水面標高（0.48 メートル）より約 30 センチ高い位置に松浜の池が存在することがわかった。

**【池の塩分濃度について】**

・阿賀野川の洪水時、川の水位に変化はあっても松浜の池の水位に大きな変動はない。さらに、池に生息・生育している魚類や水生植物、新潟市が測定している塩化物イオン濃度をみると、松浜の池は淡水であることがわかった。

**【今後松浜の池でやっていきたいこと】**

・河口閉塞湖は全国にあるが、大半が川を通じ海とつながっている。松浜の池は、海岸から 100 メートルしか離れていないにもかかわらず淡水池として独立している池は全国的にまれである。さらに貴重な動植物が生息・生育している松浜の池は、今後も調査・研究を継続していく必要がある。
・今後は、水中カメラを使った池の中の湧水場所の特定、地元での聞き取りと写真などの情報収集、地元の方への調査報告会を開催する予定である。

「松浜の池と松浜地区コミュニティ協議会地元学部会の活動について」

（村山　和夫/松浜コミュニティ協議会地元学部会部会長）

【松浜地区コミュニティ協議会地元学部会について】

・2005 年に松浜地区コミュニティ協議会が設立された後、地元にあるものに光をあて、それを守っていくために、2007 年コミ協内に地元学部会ができた。地元学部会では、地域の食材を使ったお菓子の試作品をつくったり、松浜小唄の保存活動をしているほかに、松浜の池（ひょうたん池）の環境整備活動を行っている。

【松浜の池の昔と、池での活動状況について】

・50 年以上前、自分が子どものとき、松浜の池は「池」ではなく入り江であった。阿賀野川の出口、海側にある港に行く時は、最短距離である入り江の口を歩き、シジミといった貝類を採ったり遊びながら向かった記憶がある。そのころは子どもが歩けるくらい、水深が浅かった。新潟地震が起きた 1964（昭和 39）年もまだ入り江だったと記憶している。

・1994（平成 6）年か 1995（平成 7）年くらいに漁港の改修工事の話があり、ヨットハーバーにしようという話もあった。しかし、これらの話は実現しないままに立ち消えた。ただ、それが実現しなかったからこそ、現在の池が残っている。

・松浜の池は 1997（平成 9）年、第 8 回全国トンボ市民サミットの会場の一つになったが、現在もオオモノサシトンボ、オオセスジイトトンボといった絶滅危惧種のトンボがみられる、貴重な水辺空間である。しかし、地元の住民でも池の存在を知らない人が多いため、松浜の池への案内看板・池の紹介看板を設置、池を一望できる展望スペースを設けた。

・2011（平成 23）年の 3 月から阿賀野川堤防耐震対策事業が始まり、工事のための足場として、池を半分ほど埋めなければならなくなった。その際は国土交通省や業者と話し合いを行い、池の自然環境に影響がないように工事を進めてもらった。

【現在の生物相について】

・2015（平成 27）年 3 月に工事が終わったあと、池も元通りにしてもらったが、トンボ類や、魚類、植物に影響がなかったかと心配していた。しかし、2015（平成 27）年 6 月、松浜小学校の 3 年生の総合学習で観察会を行った際、オオセスジイトトンボを確認でき、さらに 7 月末に実施した地域の人を対象にした観察会では、6 月に確認できなかったオオモノサシトンボを確認できた。また、7 月は非常に多くのオオセスジイトトンボを確認することができ、これくらいいれば、絶滅することはないだろうと安心した。

・現在、池にはエビ類の他にライギョやフナ、そしてメダカが繁殖している。ブラックバスは釣りあげられてほとんどいないが、最近はニシキゴイを確認した。誰かが池に放したのだと思うが、こういった行為は規制されていないため、今後具体的に池の保全を考えるとき、この対策についても考えていかなければならない。大事にしていくために、どういう形で保全していくことができるか、考えていきたい。

【今後について】

・個人的には松浜の池は、有名にならないほうがいいのかなとも思っている、色々な人が来るようになるとごみも増え、環境が変わってしまうのではないかという不安がある。松浜の池は知っている人が知っていて、展望スペースのベンチに座って池を眺められるような、ゆっくりとした時間を楽しめるような場所になればいいなと思う。

※講師の大谷さんからは、潟に関連した黒埼地域の歴史や地名の由来などについて，ご講義いただきました。

**「郷土の歴史から見えてくるもの～川切れの痕跡を残す水戸際池～」**

**（大谷　一男/黒埼南ふれあい協議会会長・木場の郷土を愛する会代表）**

**【近世における自然災害と自然破壊】**

・地名は土地の目印、人と人との共通に使用する符号として発生したものである。金巻の池というのは池の地籍にちなんだ名前であり、地元木場ではあまり使われていない。所有者の家の屋号に由来した「山佐池」、諏訪神社の池のほとりにあることから「宮池」などと呼ばれている。昔は農業用水池として使用していた。

・川の土手が切れ、水が急流のように流れ入るその切り口を水門（みーと・水戸）というが、その際にある池という意味の「水戸際池（みとわいけ)」が、本来の名称である。

・落堀は、過去の洪水による破堤の際に流水によって浸食されてできた凹地で、池として残っているものをいう。旧黒埼町でも、野端切れ、諏訪堂切れ、供養塚切れ、木場切れ、金巻切れ、大野切れ、柳作切れといった川切れによる落堀が多く残っていた。しかし、現在も残っているのは、天明年間（1781～1789）と 1863（文久 3）年に起きた「木場切れ」によってできた金巻の池だけである。

**【「場・潟・津」に共通する越後平野と濃尾平野】**

・地名からは、その土地の歴史をたどることができる。越後平野と、岐阜県南西部から愛知県北西部にかけて広がる濃尾平野は地形の成り立ちがよく似ているが、地名についても共通性をもっている。例えば黒埼地域で「木場」のような「場」のつく地名は、濃尾平野でも多く確認されており、墾田に由来した名称であると考えられる。

・また、越後平野には過去多くの潟が存在したことから、その潟の名称に由来した「潟」とついた地名が多い。さらに古津、新津といった「津」は内湾の船着き場としての港を意味した地名である。

**【木場城と米沢上杉家之藩山吉家伝記】**

・木場集落の周りは、古くから田潟、大潟などをはじめ大小の潟湖に囲まれていた。上杉景勝と新発田重家の戦いにおいて、上杉景勝の前線基地として使われた木場城もまた、潟湖の地形を利用して築城した水城であった。

**【水戸際池伝説（八郎のオジ)】**

・最後に、金巻の池に残る伝説、「水戸際池の伝説」を紹介する。これは、「村の泥棒の嫌疑がかかった男を中ノ口川に投げ込んた後、大雨によって洪水が起きて村が流されたことを、その男のたたりとして恐れた」という伝説である。これは、時代背景に矛盾も多いことから、水害を恐れた一種の怨霊伝説、説話の類いではないかと考えている。